

---

# おんなのこ × おんなのこ

ささやか椎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おんなのこ×おんなのこ

### 【Nコード】

N7545W

### 【作者名】

ささやか椎

### 【あらすじ】

幼少より同性に好かれやすい女子高校生弓奈は、入学を期に「女の子からモテない普通の女の子」を目指し奮闘していくのだが・・・同性との恋に興味がない美少女弓奈と彼女をとりまく個人的な少女たちとの運命をひも解く百合系学園ラブコメディ

## 1、序

弓奈が納戸の本棚を整理していると、小学校2年生の時のアルバムの際間からこんな日記が出て来た。

『なつ休みはたのしいことをたくさんしました。おばあちゃんちにも行きました。おばあちゃんちのとなりには大きなおうちがあります。そこには白い犬と、二ひきの子ネコと、きれいなおねえさんがいます。わたしはおねえさんとあそぶのが大好きです。おねえさんとお買い物に行ったり、しゃぼん玉をしたり、いっしょにお風呂に入ったりしました。おねえさんはわたしのかおをおねえさんのむねにおしあてたり、わたしのむねやおなかにケーキのクリームをぬってそれをなめたりしました。おねえさんのおっぱいはとてもやわらかくて、おねえさんのしたはクリームでぬるぬるになっていました。おばあちゃんはいえからかえるとき、おねえさんはこっそりわたしに会いにきて、おねえさんとわたしがしていたことはふたりだけのヒミツ、だれにも言わないでねと言いました。わたしが元気にうなずくとおねえさんはまわりにだれもいないのをたしかめてからわたしの口にきすをしました。ほっぺとかむねとかせなかとか、あとは足とかにしかチューをされたことがなかったので、びっくりしました。おねえさんはわたしをぎゅっとだきしめたまま、わたしのしたをチューチューとすいました。このときのおねえさんはとてもいいにおいがしました。とても気持ちよかったです、おねえさんにもしてあげたくなくて、わたしもおねえさんのしたをチューチューとすいました。先生も女の子の人数だけ、女の子ときすをしたことがありますか。とても気持ちよかったですので先生におしえてあげようと思います。だれにも言わないでねとおねえさんに言われたので、かくのならないのかなと思って作文にかきました。ふゆ休みもまた

おばあちゃんちへあそびに行くので、またおとなりのおねえさんと  
きすがしたいです。』

弓奈は顔を真っ赤にして日記をくすぐりに押し込んだ。

## 1、序（後書き）

読んで頂きありがとうございます。本作は同性愛を扱う小説ですので苦手な方はご注意ください。稚拙ではございますが、ストーリーの完結まで責任を持って執筆いたします。文章表現等のご指摘はもちろん、作品内容に関しましてもご意見ご感想等頂ければ今後の活動にぜひとも活かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

## 2、弓奈

誰もが彼女を振り返った。

透き通る肌の白に柔らかな黒髪は麗しく映え、絵画のごとく整った顔立ちに凜とした瞳が星のような輝きを灯している。彼女は名を弓奈といい、廊下を行き交う他の生徒たちと同じくサンキスト学園の新一年生である。

弓奈は女子高校に進学することになり抵抗があった。ここだけの話だが、弓奈は大変同性からモテる女なのである。ちよつと外へ出掛ければ知らない女子大生にキスをされたり、塾の若い女講師に派手な宿泊施設へ連れ込まれそうになったりと、彼女には幼い頃から怪し気なエピソードが絶えない。小学校低学年の頃は単純に大人の女性に可愛がられることを喜んでいたが、やがて性的な欲求とその行動について本能的に理解し得る年頃に近づいてくると、急に自分という存在が非常に恐ろしく危なっかしいものに感じられてきたのだ。

傾向と対策というものは試験勉強にのみ重要なことではなく、自分のコンプレックスを克服するためにもぜひとも把握するべきものである。弓奈は「同性から好かれ易い」という悩みを自分なりに分析し、これに打ち克つ術をこの春休みに思いついた。弓奈の抱える悩みの大きな特徴として、年上にはかり好かれるという点があげられる。それは自分が中途半端に天然で、可愛い子ぶっているのがいけないのだと弓奈は考えた。つまり、高校生になったこの期に思い切ってイメージを切り替え、クールなキャラクターでやっていこうというのである。そうすれば弓奈を見た年上の女性たちは「生意気に格好なんか付けちゃって」と思うに違いない。人から嫌われるのは確かにいい気持ちはしないが、このまま同性愛だらけの青春を歩み続けるよりは余程マシである。弓奈は「普通の女の子」になりた

いのだ。

入学式が終わってホールの化粧室へやってきた弓奈は鏡の中の自分とにらめっこをしている。弓奈は中学の三年間でぐっと背が伸びた。胸も大きくなり、腰は品良くくびれ脚も細く長いので充分に「クールな女」としてやっていけそうである。弓奈は今日、彼女にとって初の試みとなるポニーテールを作ってみた。言うまでもなくポニーテールは髪を高めの位置でひとつに結び、うなじの部分を見せる髪型であるが、弓奈の場合髪を下ろしている時よりもこのほうがずっと大人っぽく見える。

「よおし。」

しゃべり方もクールな感じにしようと弓奈は思った。人が寄り付きにくいような、冷たいオーラも出せるようになればベストである。友達は確かに欲しいが、誤って恋人が出来てしまったらたまらないからだ。

「あの・・・」

気がつけば弓奈の背後に少女が立っていた。少女は弓奈が鏡を独占していたために洗面所が使えなかったらしい。

「あは、ごめんね。はい、どうぞお」

弓奈はそう言って少女に洗面台を譲った。今のしゃべり方はクルルさに欠けていた感じがあるので、次に口を開く機会があれば申し訳ないがもっと冷ややかに接しようと弓奈は思った。髪をいじりながらそんなことを考える弓奈を、少女は鏡越しにそっと見つめている。

「すみません・・・」

ハンカチで手を拭き終わった少女が、少し間を置いてから弓奈に近づいてそう言った。

「ん、どうしたの」

急に声を掛けられたので弓奈は少々驚いたが、クールな振りをして少女に向き直った。少女の頬は桜色で、何やら恥ずかしそうにもじもじとしていてまばたきも多い。弓奈は動揺した。

「あの・・・クラスと名前教えていただけませんか」

少女の無垢な瞳が弓奈を見上げてる。同い年の女の子からこのようにラブリーな瞳で見つめられたのは初めてだった。

「・・・私はC1組の倉木弓奈だけだ」

弓奈が答えると少女は花のように可愛らしく微笑んだ。

「倉木さんですかあ。倉木さん・・・倉木さんかあ・・・」

弓奈はわざと無愛想な感じで返事をして少女を突き放したつもりなのだが効果はなかったらしい。少女は少しうつむいて、弓奈にも聴こえるか聴こえないかというささやくような声でこう言った。

「倉木さん、とっても素敵です・・・」

少女は弓奈に会釈してから逃げるように廊下へ飛び出していった。

弓奈はしばらくその場に立ち尽くした。やはり女子校に入ったのは失敗だったと思った。

ホームルーム開始のチャイムがゆるやかに廊下に響き始めた。



### 3、鉄棒

クール路線も徹底しすぎるとモテてしまつのかもかもしれないと弓奈は気づき始めた。年上から気に入られるほど可愛くなく、年下から好かれるほど格好良くないというのが弓奈の理想の自分である。実現のためにはまず、目立たない事が重要だ。

1年C1組の記念すべき最初の授業は体育だった。フランス語あたりの無難な授業を期待していた弓奈だったが、運動は嫌いではないので体育館への移動等の面倒さを除けば悪くないスタートではある。

ところがこれが大問題だった。今日に限って弓奈はかなりエッチなデザインの下着を身につけていたのだ。誤解しないで頂きたいのは、決して弓奈にそういう趣味があるわけではないということである。サンキスト女学園は全寮制なので、新生活を始めるにあたり必要な物資の多くを学園周辺で調達する必要がある。現在都内の工場で経理をしている沢見という女性と弓奈は知り合いのだが、彼女がこのサンキスト女学園の出身で、寮での新生活にも詳しいため「これ、何かの足しにしてね 私可愛いユミナちゃん」というメモと共に大量の衣類を送って来てくれたのだ。そして中身をよく確認しないままに沢見のプレゼントを新生活の下着に採用してしまったことを、今朝になって弓奈は激しく後悔したという訳だ。

男性には分からない話かもしれないが、女子校の更衣室の中は少々破廉恥な場所である。自分の下着を他人に見られることを恥じらうような乙女はそうはいない。ところがラッキーなことに入学してまだ日が浅いので、更衣室の雰囲気は比較的大人しかった。これならば壁際にうずくまり、カバンでバリエードを作って、ハムスターのようにちょこちょこ着替えることが許されるだろう。少々格好わるいが、弓奈はまだサンキストの制服のシャツに慣れていないの

で体操着を着てからシャツを脱ぐなどというイリュージョンは出来ないからやむを得ない。

弓奈がもそもそと着替えている間に紹介しておく、彼女の下着はふわふわのレースをあしらっておきながら情熱的なカーマインレッドとブラックを基調としたテーマ不鮮明の逸品で、下は黒いリボン付きの一部透け透けTバックである。なぜ沢見が弓奈の下着のサイズを知っていたのかななどはだいたい察していただきたい。

見事誰にも見られずに着替えを成功させた弓奈を待っていたのは運動らしい運動のないオリエンテーリングだった。着替える必要なんてなかったじゃないかと弓奈は担当の先生をじつとにらんでみたりした。担当の先生は香山という若い女性で、なるべく女性を避けようとしている弓奈ではあるが、体育の担当くらいは正直女性の方がいいと思っていたのでこの点は良かった。

「えー時間が余っちゃったので、ここで先生の得意技を披露しちゃいます」

年甲斐も無くキャピキャピした先生が望まれてもいないプチサーカスを自ら開演したがるので、生徒たちは観覧という形で彼女の趣味に付き合うことにした。先生はわざわざ室内用の鉄棒を倉庫から運び出してフロアに設置し、逆上がりで鉄棒に上がってから反対を向いて鉄棒の上に座った。

「コウモリ回りしまーす！」

先生はそう言って元気良く後方へ体を傾けたにも関わらず、逆さまにぶら下がった状態で停止してしまった。

「あれえ？」

先生は盛り上がる余りコウモリ回りという技のやり方を忘れてしまったらしいのだ。弓奈は運動がそこそこ得意なので先生のコウモリ回りの何が間違っているのか一目瞭然であるが、それを指摘するほど弓奈は愚かではない。目立たないように生きる・・・今朝自分にそう誓ったばかりだからだ。しかし生徒たちは妙な雰囲気になるし、先生は逆さまのまま首をかしげているしとても授業にならない

い。仕方なく弓奈はそつと先生に声をかけることにした。

「あの・・・先生。コウモリ回りって手を離すんだと思いますよ」  
先生は弓奈のアドバイスを聴いて「ああ！」と言って鉄棒から降りた。

「君かわりにやってくれない？」

よもやと思ったが、早くもクラスで一番の美少女として注目を集め始めていた弓奈には惜しめない拍手が送られ、あつという間に引き下がれない状況が出来上がってしまった。弓奈は仕方なく立ち上がり鉄棒を握った。

あまり格好よく目立ってしまうとモテてしまう危険がある。おこがましい悩みに聴こえるだろうがこれが弓奈の現実なのである。だがせつかくこうして皆の前に出た以上サクッと成功させてしまいたい気もする。

「・・・よいしょ」

弓奈が鉄棒に上がったただで数人の女子生徒から歓声があがった。この時の弓奈のかつこよさといったら、のちに生徒たちの夢に出るほどである。弓奈は鉄棒に座って手を離し、後ろ向きに回り始めた。弓奈のポニーテールが空中に豪快な運びで風を描く絵筆のようにぐるぐると回った。生徒たちは弓奈にすっかり見とれている。何度か回ってみせたので弓奈はそろそろ降りることにした。難易度が非常に高いことは確かだが、降り方自体は単純だ。タイミングを見計らって脚を鉄棒から放し、回りながら着地するだけである。少々楽しくなっていた弓奈は完璧なタイミングで美しく脚を伸ばし、鉄棒から降りた・・・はずだった。

「ほっ」

物語の意外性の中には幸と不幸のどちらかが潜んでいる。少なくとも弓奈にとってこの瞬間は不幸であった。半年程使用されていなかった室内用鉄棒には相当量のホコリが付着しており、倉庫の湿気と相まって半天然の強力なすべり止めとなっていたのである。これのせいで、手も使わずに脚だけで回っていた弓奈の体操着はなんと

20センチ程下にズレていたのだ。おまけに鉄棒から脚を離れたあとは遠心力が脚部下方に働く。あわれ、弓奈の体操着のパンツは遙か前方に吹っ飛び、弓奈のオトナのパンツが生徒たちの目に飛び込んだ訳である。

「いやあ！」

すぐに事態を察した弓奈はシャツを下に伸ばして必死にパンツを隠した。一部透け透け黒いリボンのTバックを。その恥じらう姿は非常に可愛かったが、今更頑張って隠しても後の祭りである。生徒たちの脳裏にはその刺激の強いパンツがすっかり焼き付いてしまったのだから。

こうして弓奈は「かっこよくて、可愛くて、そしてとてもエッチな美少女」として有名になっていくのであった。

#### 4、ふたり

硬派で近付き難い印象を手に入れるためにはそれなりの団体に所属するのが手っ取り早い。例えばクラブ活動である。

硬派なクラブと聴いて何を思い浮かべるかは人それぞれであるが、弓奈の場合は運命と言っても過言ではない強烈な力によってあるひとつのクラブに限定されていた。

「弓道部・・・」

弓道など一度もやったことはないが、名が名なので惹かれるものがある。しかしピカピカの学生手帳のクラブ・同好会の一覧ページに弓道部の記載はない。これほど大きな学園に弓道部がないのは実に残念である。アーチェリーの同好会はあるのだが、これは弓奈の目指すイメージとは少々異なっている気もする。

弓奈はとつとつに食堂のエビドリアを食べ終わっているのだが、学生手帳とにらめっこをしながらいつまでもお皿の底をフォークでつついている。弓奈は考え事をしている時は他に何もできない少女なのだ。お昼時の食堂は生徒たちでごった返しているのだが、なぜか弓奈の両隣りと向かい側の席には誰も腰掛けない。彼女を遠巻きに見守る生徒たちの想いは同じ。皆弓奈のお近づきになりたいのだ。だがそういった攻めの姿勢を一瞬でも見せれば弓奈に羨望の眼差しを向ける他の多くの生徒から目を付けられてしまう可能性があり、逃げ場のない全寮制女子校においてそれは社会的な死を意味する。

「んー・・・」

彼女らの思惑を知る由もなく弓奈は存在しないクラブについて悩み続ける。この調子では卒業までに友達ができるかどうか怪しいものである。

ふと、弓奈は自分のテーブルからおよそ3メートル離れた食堂の柱時計付近で、掲示物の貼り替え作業をしている生徒を発見した。

弓奈は視力がそこそこいいので、その生徒がたった今貼ったプリントの見出しをかるうじて読むことが出来た。

『学生手帳の記載内容訂正に関するお知らせ』

なんていいタイミングだろうか。もしかしたら弓道部は存在するのかも知れない。弓奈はランチのトレイを持って立ち上がり返却口で丁寧に挨拶をして食器を片付けると、周囲のアツい視線に気づかぬまま掲示板に近づいた。

「何のお知らせですか」

弓奈は係の生徒に話しかける。

「クラブのページに弓道部が追加されたりとか・・・ないですかね」  
弓奈の声に少女は振り向きもせず画鋏の刺し直しなどをしている。

「学生手帳の記載内容訂正に関するお知らせです」

少女は冷たい声でプリントに書かれてある通りの回答をした。弓奈はどれどれと言ってプリントを覗き込む。そこには『学園の沿革  
十七代目学園長 鈴原真理子ページ六行目：（誤）フラダンス教育表彰（正）フランス教育表彰』と書かれている。今の弓奈にとっては実にどうでもいい情報だ。

「やっぱり弓道部ないのかあ」

弓奈がそうつぶやいて肩を落とすと脇にいた少女が口を開く。

「剣道部や柔道部もあります。このあたりがサンキスト女子学園は独善的欧化教育を生徒に押し付けていると非難される所以です」

彼女は掲示板を見渡しながら少し怒ったように続けた。

「ですが校風は校風です。文句があるなら入学しなければよかったです」

弓奈ははっとして少女を見た。どうもこの少女は他の生徒たちと何か存在を異にしている気がしたのだ。こうして自分と話している少女は一向に緊張する様子もなく、華奢な体で黙々と高所の無断張り紙を剥がしクシャクシャに丸めたりしている。他人を寄せ付けないこの雰囲気、まさに弓奈の理想とする人物像だ。自分もこれだけ硬派な女になれば同性から恋愛感情を抱かれることもあるまいと

弓奈は思った。

「あの！ ひとつ質問が」

「なんですか」

少女は先ほどから一度も弓奈のほうを見ない。弓奈はこの距離感がたまらなく好きだ。

「私、あなたみたいな硬派な人になりたくて！ そういう人が集まるクラブを探してるんです！」

「・・・そうなんですか」

「どこかご存知ないですかね」

少女は掲示板のアルミフレームの埃をティッシュで拭き取ったりしながらしばらく沈黙したのち口を開いた。

「クラブではありませんが、ある意味非常に硬派で人が寄り付かない団体ならありますよ」

「団体？」

「はい」

少女はプリントや画鋏をまとめて帰る準備を始めた。彼女は少しだけ微笑んでいる。

「それにしても、軽薄な女性になりたくないというあなたの高い志、私は感心しました」

彼女は作業中にできたブレザーのわずかな乱れを指で丁寧に整える。ひどく几帳面らしい。

「もしよかったら放課後この棟の屋上へ来て下さい。あなたならきつと・・・」

ここで初めて少女が顔を上げ弓奈と目が合った。そのとたんに少女は動かなくなり、持っていた画鋏をひとつ床に落とした。

「あ、あの・・・どうしたんですか」

少女は弓奈より背がこぶし一つ分低い細身の生徒で、幼げな顔立ちだが凛とした目元から真面目でクールな印象を受ける。だが今はどことなくクールというより乙女チックな表情でじつと弓奈を見つめているのだがそれは何故なのか弓奈には分からない。自分の顔に

何か付いているのだろうかと弓奈は自分の頬や口元に触れてみたりしたが特に何も無さそうである。クールな女性にも乙女な顔をする瞬間くらいあるのだろうと弓奈は納得することにした。

「あの、じゃあ私そこへお手伝いに行っていていいんですか」

「え・・・あ、はい」

少女は急に小声になって弓奈から目をそらした。

「き、厳しい作業ばかりですが。それでも平気だという自信がおありなら・・・来てもいいです」

少女は強気とも弱気ともとれる奇妙な物言いをして弓奈に背を向け歩き出す。弓奈は少女の背中に言った。

「私、倉木弓奈っていいいます！　どんなお仕事でも頑張ります！

あなたみたいになりたいです！」

少女は返事の代わりに一度立ち止まったが、振り返らずにそのまま食堂から去っていった。

「掲示委員会かなあ」

元より弓奈は頑張り屋なのでそういった委員の仕事に精を出すことに吝かでない。あの少女のようなおカタい娘になり、同性との不用意な接触を避けることで弓奈の理想とするシンプルで無難な学園ライフを手にすることができはるはずである。

ふと周囲を見回してみると、二人のやりとりを盗み聞きしようとする女子生徒たちが柱時計の陰に集まっていた。彼女たちは弓奈に見つかると愛想笑いをしてから慌てて散っていった。このようなことは日常茶飯事である。

さて放課後にビッグな楽しみを得た弓奈は、早めに教室に戻ってフランス語の予習でもしようかなどと考えつつ足を一歩前へ踏み出した。その瞬間、彼女はスカートから細くキレイなふとももを覗かせて飛び上がった。

「いったーい！」

画鋏がひとつ落ちていた。



## 5、紫乃ちゃん

紫乃は弓奈を知っていた。

まだ入学して間もないというのに倉木弓奈の噂は広がる一方だ。

絶句する程に容姿端麗な彼女は、教師に指導を入れるほどスポーツ万能で、おまけに時折チャーミングな笑顔とセクシーなパンツを見せてくるらしいといったような噂である。しかし、紫乃の心の中に弓奈が特別大きい存在となっているのには他に理由があった。紫乃と弓奈は学年もクラスも同じ、座席はすぐ隣りで寮部屋も隣接しているのである。昼休みの弓奈はそうとは知らずたまたま紫乃に声を掛けてきたらしいのだ。

「はぁ・・・」

紫乃は屋上の若緑色のフェンスにもたれてため息をついていた。

確かに紫乃は曲がったことが許せない大真面目な生徒で、かつ物事を客観視する能力にも優れていると言える。しかし、弓奈が期待するようなクールな女ではない気がするのだ。紫乃は弓奈の前では平靜でいられず頬や耳は真っ赤に、頭の中は真っ白になってしまうのだから。こんな感覚は紫乃が初めて経験するもので、先人達はこういった症状が出る病を『恋』と呼んだ。

「はぁ・・・」

食堂では自分がそっぽを向いていたせいで声をかけてきた生徒が弓奈だと気づかず仕事に誘ってしまった。もし弓奈と分かっていたら会話もせずにその場から逃げ出していただろう。それは紫乃が臆病だからではない。弓奈に近づくには大きなリスクを負い、嫉妬の的となる覚悟をしなければならぬからだ。それほどに倉木弓奈という少女は生徒達の注目を集めているのである。自分にはその覚悟も器もない、紫乃はそう考えているのである。

「はぁ・・・」

「はあ」

突然すぐ隣りから自分のものでないため息が聴こえたので紫乃は飛び上がってしまった。

「えへ、驚かせちゃってごめんなさい」

そこには紫乃だけを見つめて無邪気に微笑みかける学園のプリンセスがいた。紫乃は心臓はその高鳴りについていけず、壊れて止まってしまうそうである。しかし紫乃はもう後に引き下がれない状況に立ってしまったので、弓奈の言う「硬派な女性」を演じていくことにした。

「お、遅いです」

「・・・ごめんなさい。保健室に行ってたんです」

見れば弓奈は上履きではなく保健室の貸し出しスリッパを履いている。弓奈が午後の授業にいなかったのはこのためらしい。足の甲に重い物を落としたか、尖ったものを踏んだに違いないと紫乃は思った。本当は紫乃が落としていった画鋏のせいで怪我をしたのだが紫乃はそれに全く気づかない。

「ま、まあいいです。作業を手伝って下さい」

「はい！ でもあの、いくつか訊いてもいいですか」

弓奈の柔かな髪が春風に揺れている。紫乃は弓奈の姿を視界の隅に収めるだけで、彼女を直視することが出来ない。

「し、質問は手を挙げてからにして下さい」

「はい」

紫乃は不思議に思った。確かに弓奈という生徒は噂通りの魅力あふれる人間だ。だがそれゆえに幼い頃からちやほやされて育ったに違いないなく、いくらか尊大で思いついた一面があるにしろと紫乃は信じていた。なのに弓奈のこの無邪気な物腰ときたら、さながら天使である。格好良くて可愛くてセクシーで完璧なはずなのに、それに奢らない献身的努力家・・・そんな少女はこの世にいるはずがないと紫乃は思っていたので混乱をしているのだ。

「いくつか質問なんですけど、まず先輩のお名前を教えてください」

弓奈は紫乃のことを先輩だと思っている。紫乃はいわば弓奈の目指す硬派道の師匠なのであるから、なるべくクールに答えることにする。

「あー、私のことは紫乃と呼ばばいいです。同級生ですから、呼び捨てでも」

「同級生だったんですか！　じゃあ紫乃ちゃんでもいいですか」

あと10メートルも距離をとれば弓奈の目を見て話すことが出来るのだろうが、紫乃は体が石膏のように固まっついていて動けないので無理な話だ。

「しかも・・・同じクラスだったりします」

「ええ！　そうなんだ！　よろしく紫乃ちゃん」

次の瞬間紫乃の小さな手は弓奈の温かい手の中にあつた。弓奈は紫乃の手を取ったのである。紫乃は思わず「ひゃ！」と言って手を引つ込めた。弓奈は少し驚いたような顔をしたが、やがて照れながら上目遣いで謝った。

「あ、ごめんなさい・・・ちょっと嬉しくなっちゃって。私友達いないから」

紫乃は弓奈を思いつきり抱きしめてしまいたい衝動にかられた。

「い、いや。気にしないでいいです」

紫乃がそう言うつと弓奈は手を自分の後ろに回したまま紫乃の顔を覗き込んだ。紫乃は胸のトキメキを悟られぬようにそつと下を向く。

「ありがとう。紫乃ちゃん。もうひとつだけ質問してもいい？」

「な、なんですか」

「紫乃ちゃんは、女の子に恋したりしないよね」

風が止まった。紫乃は何もかも見透かされているような気がして弓奈の瞳を見た。しかし彼女の瞳はやはり無垢に輝いていて、自分

をからかってこのような事を訊いてきたとは思えない。まだ紫乃の胸の内はバレていないのだ。紫乃は弓奈の向こうを流れる白い雲に視線を逃がしながら、平然を装ってこう答えた。

「あ、当たり前です。それどころか、恋そのものに興味がないです」「やっぱり！ 紫乃ちゃんは本当に硬派なんだねえ」

弓奈が再び紫乃の小さな手をとる。からまった二人の細い指先に、紫乃は長い旅路の始まりを予感した。

「・・・紫乃ちゃんに会えてよかった」

弓奈がそうささやいて目を閉じる。彼女の微笑みに紫乃は、幼い頃によく遊びに行った古い教会のステンドグラスに佇む女神様を見た気がした。弓奈の体と心から、透き通った輝きと柔らかで離れがたいぬくもりを感じたのだ。もしかしたら倉木弓奈という少女は計り知れないほど性格が良い娘なのではないかと紫乃は思った。その証拠はどこにもないのだが。

弓奈の指先から微かに消毒液の香りがした。

## 6、アイス

「これで最後かな」

二人の頬が夕日の茜色に染まっている。

「そ、そうですね。もう寮に戻りましょうか」

弓奈が手伝った仕事はそれほど複雑なものではなかった。サンキスト女学園では6月に体育祭を執り行う。なぜわざわざ梅雨の時期を選んでいいのかは不明だが、新クラスのメンバーとの親睦を深めるいい機会であることは確かなので楽しみにしている生徒もいる。ところがこの体育祭で毎年使用されていた得点板がこの春、とある体育教師の手違いで処分されてしまっていたのだ。やむを得ず新しく作成することになったのだが、得点板を屋上のフェンスに設置する際の金具の発注をまずしなければならず、そのサイズを調べる必要があったのだ。二人が行った作業は体育教師香山歌の見にくい図を参考にフェンス各部の長さや幅、高さをメジャーで測るというものだった。掲示委員会はこんな仕事もするのかと弓奈は感心し、せつせと働いた。

「ねえ紫乃ちゃん」

夕焼けの照る広い渡り廊下に長い陰が二本並んでいる。

「どうしたら紫乃ちゃんみたいにクールになれるかな」

弓奈の質問に紫乃はすました顔で答える。

「そ、そうですね。普段からヒステリックでセンサーショナルな事物を避けることが肝要です」

「へえー」

弓奈にとって紫乃は先生のようなものだ。

「あとは冷たいものを毎日たくさん食べることですね」

「え、アイスとか？」

「はい。主食を氷菓にすることで脳内を低温に保ち、外界の刺激に

対し常に冷静な判断を下します」

「すっごーい」

紫乃はすぐに後悔した。まだまだ朝晩冷えるというのに調子に乗ってついいい加減なことを言ってしまったのだ。

「クールな女の子になるのも大変なんだねえ！」

「た、大したことじゃないですよ」

「いやいや！ すごいよ紫乃ちゃん」

弓奈が妙に子どもっぽいのは紫乃に心を開いている証である。容姿端麗にしてスポーツ万能なモテモテ少女も本当は甘えん坊なところがあるということなのだ。

二人が寮の昇降口に差し掛かったとき、弓奈は「ちよつと寄っていい？」と言ってエントランス内のコンビニを指差した。サンキスト女学園のコンビニエンスストア『Focaccia Dolicce』通称『フォツカ』は学園内に4店舗展開しているらしいが弓奈は一年生寮店しか見た事が無い。弓奈は紫乃と共に店内に入るとアイスコーナーへ向かった。

「私も実践する！」

弓奈はそう言って30円アイスを3本カゴに入れた。サンキスト女学園名物30円アイス・・・化学調味料一切不使用で有機野菜のたっぷり入った健康的シャーベットであり、二年生寮のオーロラパフェ、三年生寮のリリーマシユマロに並んで雑誌で紹介される程の人気商品である。

「紫乃ちゃん。今日はもう冷たいもの食べたのかな」

紫乃はビクツとして顔を上げた。

「ま、まだでした。私も買って行きます」

さすが弓奈の師匠である。紫乃は慣れない手つきでアイスを5本カゴに入れてレジに並んだ。

クラスが同じということまでは紫乃に聴かされていたのだが、寮の部屋もお隣りだったなんて知らなかったので弓奈は大喜びした。弓奈は廊下に人がいないのを確認すると屋上にいた時と同じように

紫乃の手を取って「紫乃ちゃんが隣りでよかった。よろしく。よろしくね」と何度も繰り返し返した。紫乃はドキドキしてしまって目をそらしながら黙ってうなずくのが精一杯だった。

さて自室に戻った弓奈がアイスを冷やそうと冷凍庫を開けると、中にはすでにカボチャ味の30円アイスが二本入っているではないか。すっかり忘れていたのだが、これは香山先生から貰ったのだ。

一昨日の昼休み、本でも読んで現実逃避しようと思った弓奈が桃色の毛糸であやとりをしつつ図書室に向かっていると、前からバイオリンケースを抱えた香山先生がやってきた。体育教師のくせになぜそんなものを持っていたのかは不明だが、弓奈が遠慮がちに挨拶をすると香山はご機嫌な様子で近寄って来た。

「倉木さん。この前はごめんなさい」

「え」

「みんなの前で恥ずかしい思いさせちゃったでしょ？」

「パンツのことである。」

「あ、いえいえ。別にいいんです。全然気にしてないですから」

気にしていない訳がないが、先生のほうから謝られてしまったら弓奈も何も言えなくなってしまう。

「おわびにねえ、これあげる！」

香山先生はポケットに手を入れたりカバンを探ったり胸を触ったりしたあと「あ、ここだった」と言っただけでバイオリンケースを開けた。「もうすぐハロウィンだからさあ。ほらあ、カボチャ味だよ」

中から出て来たのがその30円アイスだった。もちろんドロドロに溶けている。

「あ……先生、ハロウィンは十月だった気がするんですけど」

「遠慮しないの。はい。はい。二本あげるね」

先生は先生なりにこの前のことを気にしていたのかも知れない。

こうして弓奈は香山先生の強引な罪滅ぼしに付き合わされアイスを二本先行入手していたのだった。

「そっだ」

弓奈はカボチャのアイスを持ってお隣りの紫乃を再び訪ねた。確か紫乃が買ったアイスの中にカボチャ味はなかったはずなのでお裾分けをしようと思ったのだ。お米やパンの代わりにアイスを食べているらしい紫乃ならばアイスは何本あってもありすぎることではないだろう。扉をノックするとオレンジ色のアイスをくわえた紫乃が顔を出した。こうして見ると紫乃は前髪をそろえろとすごく可愛くなる気がした。いつか髪をカットする時に提案しようと思っただけだ。

「これ余ってるの。あげる」

弓奈の差し出したものを見て紫乃は目を丸くする。

「あ、ありがとうございます。いえ、5本じゃ足りなかったくらいですから」

本当は5本のアイスの処理に困っているくらいなのだが紫乃は本当のことを弓奈に言えない。

「喜んでくれて嬉しい！ やっぱクールだなあ紫乃ちゃん。それじゃ、おやすみ」

自室に戻りゆっくりシャワーを浴びた弓奈は、楽しみにしていたアイスを食べ始めた。弓奈は食いしん坊なのでニンジン味とナス味を二本同時に食べてみることにした。入寮記念に貰ったボディータオルは非常にキメの細かい泡を生んでくれるのでいつもより肌がすべすべになったような気がする、あのタオルはフォックで売っているのだろうか・・・などと考え事をしていて、なんとアイスの容器の内側から『当たり』の文字が現れた。しかもよく見ると二本とも当たりだったのである。弓奈は部屋からの外出が禁止される夜9時ぎりぎりにコンビニに駆け込み、そこでアルバイトをしている二年生の生徒からキャベツ味のアイスを二本もらってきた。ふかふかのカーペットが敷かれているとはいえ階段を猛ダッシュする弓奈は自分が足に怪我をしていることをすっかり忘れていたとしか考えられない。

「紫乃ちゃん」



扉の前から声をかけると紫色のパーカーを来た紫乃がフードを被った状態でゆっくりと顔を出した。なぜか唇もちよっぴり紫色である。

「紫乃ちゃん。これ、二本当たり出たから一本あげるね」

紫乃は弓奈の差し出したものを見て一瞬怯えたような表情をしたが、すぐに強気で涼し気な顔に戻りアイスを受け取った。

「あ、ありがとうございます。いえ、6本じゃ足りなかったくらいですから」

「紫乃ちゃんかつこいいなあ！」

「いつものことです。こ、こ、これっくらい」

「私も頑張つて紫乃ちゃんみたいになる！ これからもいっぱい勉強させて下さい！」

「私くらいクールになるには、相当な鍛錬が必要ですよ」

「頑張ります！」

「き、期待してますので」

「うん！ それじゃあ、また明日ね。おやすみ」

「お、おやすみなさい」

扉を閉めた瞬間、中から紫乃のクシヤミが聴こえた気がしたので、がきつと弓奈の気のせいだろう。

## 7、生徒会長

「何か作ってあげようか」

「・・・いいです」

「お着替え手伝おうか」

「じ、自分でできます!」

何故か風邪を引いてしまった紫乃のために弓奈は朝っぱらから付きつきりで看病をしていた。部屋に二人つきりで、しかもベッドに横になる少女の手を握るなど今までの弓奈ならば怖くて出来なかった。しかし、相手は安心安全な紫乃ちゃんである。紫乃はクールで硬派な少女なので弓奈に恋をすることは絶対にはいはずなのだ・・・弓奈はそう信じている。

「私のことはいいですから、弓奈さんは授業へ行ってください」

「でも・・・」

「あ、あなたと一緒にいると、暑苦しくて熱が上がるんです」

確かにそうかも知れないと弓奈は照れながら紫乃の手を離れた。

「んーそれじゃあ、学舎行って来ようかな」

「あ、ひとつお願いをしてもいいですか」

そう言っただけ紫乃はベッドの脇に置かれていたカバンから昨日二人で作った得点板に関するメモを取り出した。

「本来は香山先生に提出する予定だったのですが、来週の金曜日まで先生はいらっしゃらないらしいので、生徒会長さんに渡さなくてはなりません」

「せ、セイトカイチョウ?」

「はい。体育祭の件はすべて会長さんがまとめていらっしやいますので。生徒会長は二年F3組の小熊アンナさんという方です。少し変わった人ですので充分気をつけて下さいね」

「こ、小熊さん・・・」

きつと冬は穴蔵でじつとしている可愛い先輩に違いないと弓奈は思った。弓奈はメモを受け取ると紫乃のほっぺをつついて彼女に言う。

「私に任せて。だから紫乃ちゃんは無理しないでゆっくり休んでね。今日の紫乃ちゃんはクールじゃなくてホットなんだから」

「わ、わかりましたから・・・頬を・・・さわらないで・・・」

サンキスト女学園は土曜日も毎週授業が行われるがそれも午前中で終了する。弓奈はお昼ご飯を食べにいく前に生徒会長を探すことにした。会長が二年生寮に帰ってしまうと月曜日まで会えないと考えたからである。弓奈は学生手帳の教室案内図からF3組を探していたが、ふと思いついてページをめくり校内見取り図を開いた。

「えと、生徒会室は・・・」

廊下の窓際で学生手帳をにらむ美少女・・・案外絵になるものである。

生徒会室は管理棟の3階にあった。管理棟と言っても職員室は学舎にあるので生徒はおるか職員すらもほとんど寄り付かない場所である。青い銀杏並木を抜けて管理棟にたどり着いた弓奈は、上履きの代わりにスリッパをつっかけて辺りを見回した。遠くから運動部員たちのかけ声とテニスポールの跳ねる音が聴こえるだけで、そこには人っ子一人おらずひんやりした空気だけが静かに漂っていた。こりゃ会長さんいないなと弓奈は思ったが、念のため生徒会室を指してワイン色のカーペットが敷かれた薄暗い階段を上っていく事にした。

扉には『会長室』という微妙に的外れなルームプレートが掛かっていた。しかし校内見取り図によれば生徒会室はここで間違いない。弓奈は制服のリボンが曲がっていないかなどを確かめてからそつと扉をノックした。

「はい」

二度目のノックをしようとしたとき扉は軽やかに開く。中から顔

を出したのは弓奈の想像を遥かに超える存在感をもった少女だった。  
「どなたかしら」

この規則の厳しいサンキスト女学園で、ましてやその生徒会長が  
ブロンドヘアだなんて信じられるだろうか。おまけに瞳にはカラ  
ーコンタクトと思しき翡翠色の輝きを灯し、部屋の中からはどこと  
なくヨーロピアンなハーブの香りが漂ってくる。会長は少し変わった  
人なので注意するようにと言った紫乃の言葉が弓奈の頭をよぎっ  
た。

「あの、これ香山先生に頼まれた得点板のメモです。生徒会長さん  
に渡すよう言われていたので参りました」

小熊会長の顔をよく見れば日本人の顔立ちでありながら髪と瞳の  
明るい色が非常によく似合っている。もしかしたら会長はハーフな  
のかも知れないと弓奈は思った。

「あら、そうなの。委員のポストに入れてくれてもよかったのに、  
わざわざ来て下さったのね」

「お仕事のジャマをしてしまったですみません・・・」

本当に仕事をしていたかどうか怪しいというのに弓奈は素直な少  
女である。小熊会長はメモを受け取ると弓奈の頭のとっぺんからつ  
ま先までじろじろと見てこう言った。

「あなたもしかして、一年生の倉木さんかしら」

いったい自分の体のどこに名前が書いてあったのか弓奈に心当た  
りはなかったが、戸惑ってばかりでは会長さんに失礼なので「はい」  
と返事をした。すると小熊会長は子ネコのように人懐っこく微笑ん  
だ。

「階段を上がってきておつかれでしょう。中で少し休んでいかれた  
らどうかしら」

「あ・・・いえ、私体力だけはあるので、その・・・平気です」  
帰ろうとする弓奈を引き止めるために小熊会長は彼女の背後に回  
って腰にそっと手を触れた。

「遠慮しないでいいの。良質なダージリンが入ったから紅茶を淹れ

「てあげるわ」

「で・・・でも」

「とっってもいい香りなのよ」

いくら頼まれ事を果たしたからといって自分が生徒会長とお茶で  
きるような人間でないことは弓奈自身よく分かっている。だが小熊  
会長の執拗な誘いをこれ以上断る理由も気力もなく、少しだけ生徒  
会室に寄っていく決心をした。

「じゃああの、少しだけ」

小熊会長が左の頬だけでひっそり笑った。

## 8、甘い香り

生徒会室は確かに会長室と呼ぶにふさわしい空間だった。

会議用デスクの代わりに陶製の大きな丸テーブルが据えてあり、フローラルな模様をあしらった木椅子がそれを囲んでいる。壁紙やカーテンはいかにも女の子の部屋らしいフェミニンな感じに統一されていて、窓から注ぐ春の陽とそよ風に心地よく調和していた。

「どうぞ腰掛けて」

小熊会長はそう言いながらティーポットに紅茶葉を入れている。

弓奈はお言葉に甘えて椅子に座ることにした。

「もしかして、得点板のお仕事は倉木さんもお手伝いしてくれたのかしら」

「あ、はい。私クールな紫乃ちゃんに弟子入りしたくって。もし紫乃ちゃんが許してくれるならこれからも一緒にお仕事したいなあと思ってるんです」

「あら、そうなの」

小熊会長は紅茶をもうひとつのティーポットに移し、ティーコゼーと共に弓奈の待つテーブルへ運んで来た。

「嬉しいわ。あなたのほうから来てくれるなんて」

「え、今日のことですか。紫乃ちゃんに頼まれましたので」

カップに注がれた紅茶の湯気が、蒸気の一粒一粒を陽に輝かせて幸せそうに立ち上っている。紫乃とは少しタイプが異なるものの、小熊会長も安心して側にいられる生徒なのかもしれないと弓奈は思った。こうしてしゃべっていても弓奈に恋をしている雰囲気もなく、おまけに彼女の持つ圧倒的な存在感は他の生徒を寄せ付けなはずなので案外硬派な毎日を送っているのかもしれない。初対面の同性の前で弓奈がいつも抱く警戒心は、ここですっかり薄れてしまった。「ところで、どうして会長さんは私のことを知ってたんですか」

「え」

「私が名乗る前に私のこと分かったのだから」

会長は上品な微笑みを弓奈に向けたまましばらく何かを考え込んだ。優雅な所作と髪色が絶妙にマッチして彼女の育ちの良さと高貴な温かさを弓奈に感じさせる。

「そうね。強いて言えば、運命かしら」

「う、うんめい？」

「そ。運命」

小熊会長はティーカップを静かに置いてゆるやかに立ち上がる。

そして何も言わぬままテーブルを半周して弓奈の真横にやってきた。

「・・・小熊先輩？」

会長の青い瞳がじっと弓奈を捉える。

「私のことはアンナと呼んでいいのよ。弓奈さん」

突然弓奈は小熊会長に腕を引かれてその場に立たされた。木椅子はガタンと音を立てて後ろにひっくり返る。

「せ、先輩!？」

小熊会長はあろうことか弓奈の腰に腕を回してぎゅっと体を抱き寄せたのだ。そして息のかかるくらいにまで顔を近づけると、先ほどまでとは雰囲気の違いなんとも妖艶な微笑みを弓奈に見せた。

「噂以上よ、弓奈さん。なんて可愛いの」

今にも唇を奪われそうだったので必死に弓奈は顔を背けたが、弓奈の身体は小熊会長の腕の中である。互いの香りと温もりに包まれたまま、二人の胸は柔らかく密着し合った。

「私、すごく興奮してる」

小熊会長はそう言って弓奈の身体をさらに強く抱きしめ、柔らかい唇を弓奈の首筋にそっと押し当てる。強引に弓奈を捕まえているくせにその唇は妙に優しくかった。弓奈は幼い頃から年上のおねえさんからのキスに慣れているはずだったが、なぜかこの時は自分の体がほどけていってしまうような不思議な感覚におぼえた。それは弓奈の身体が少しずつ大人に近づいていることの証拠なのだが、

本人はまだそれに気づかない。このままでは食べられてしまう・・・単純な弓奈は小熊会長の髪の毛の甘い香りの中でただそれだけを感じた。

「やめて・・・下さい」

「だめよ」

たった一人で会長に会いに来たことを弓奈は心底後悔した。こんな僻地にあつては誰も助けに来てはくれないだろうからだ。

「大丈夫」

ささやきと共に小熊会長は唇は弓奈のすぐ耳元にやってくる。弓奈は背筋がゾクゾクした。

「すぐに夢中にさせてあげる」

「やめて下さい!」



## 9、んもう

次の瞬間、ボタンという大きな音を立てて生徒会室の扉が開く。そこにはパジャマの上からブレザーを引っ掛け、おでこに冷却シートを貼付けた少女が肩で息をして立っていた。

「紫乃ちゃん！」

突然の邪魔者登場への驚きと部屋に鍵を掛けなかったことへの後悔から小熊会長がすっかり脱力したため、弓奈は簡単に彼女の腕の中から抜け出すことが出来た。紫乃は弓奈を自分の背後に回らせてからツカツカと会長に歩み寄る。

「小熊先輩。どういうつもりですか」

「んもう。いいとこだったのに」

小熊会長はそう言ってそっぽを向き舌を出した。紫乃はため息を吐いて気持ちを落ち着かせてからいつものクールな口調で言う。

「少し熱が冷めてきたらすごくイヤな予感がしたんです。ここへ来て正解でした。ほら見て下さい、弓奈さん嫌がっていますよ。人の気持ちも考えずに自分の趣味に付き合わせるなんて最低な先輩ですね」

「今はそうかもしれないわ。だけど、弓奈さんが私を好きになればいいんでしょう？」

「あまり自惚れないで下さい。あなたが生徒会長に選ばれたのも、候補者があなたしかいなかった希有な事態にしぶしぶ職員が味方しただけじゃないんですか？ あなたがこの学園の誰からも愛されているだなんて思わないで下さい」

やはり紫乃は伶俐な少女である。自分より背の高い生徒会長に物怖じせずズバズバと語る。

「んもう。鈴原さんは堅いわあ。細かいことは気にしないの。話は聞いたのよ。これからは弓奈さんを含めて三人で一緒に頑張ってい

くんでしょう?」

ずっと一緒にいるのに弓奈は紫乃の名字を知らなかった。鈴原紫乃というのが彼女のフルネームらしい。なんとなく聞き覚えがある名字だと弓奈は思った。

「それも考え直さなくてはなりませんね。弓奈さんをあなたの側に置きたくありませんから」

「だめえ。弓奈さんがいてくれないんだったら私、今日からも生徒会長の仕事しないわ」

「もともと仕事なんてしてないくせに。とにかく、会長と弓奈さんの二人つきりで作業させたりはしませんから」

「はい！ あ、ちよつと訊いていいですか」

弓奈が突然に口を挟んだ。ちゃんと手を上げている。

「弓奈さん・・・どうしたんですか」

「いやあ、さつきからお二人のお話がよく分からないんですけど・・・」

小熊会長と紫乃は目を見合わせた。何かおかしなことを言っただろうかと確認し合っているらしい。

「紫乃ちゃんって掲示委員会の人じゃなかったの?」

会長と紫乃はきょとんとした顔をして弓奈を見る。どうやらおかしなことを言っているのは弓奈のほうらしい。

「弓奈さん、私は生徒会員です・・・もしかして知らなかったんですか」

知るはずもない。

「鈴原さんは入学してすぐ生徒会に呼ばれたの。生徒会長の私がい加減なものだから、とうとう学園長先生はご自分のご令嬢を生徒会に派遣されたらしいわね」

「学園長先生の・・・ご令嬢?」

次々と弓奈の知らない驚愕の事実が明らかになる。掲示物の張り替えや得点板の設置準備などの仕事は全て生徒会のもので、しかも紫乃は学園長の娘らしい。鈴原という名前は以前学生手帳の学園長

のページで見たものだったのだ。

「その通りです小熊会長。自治を重んじる校風は母も認めているのですから、大人に弁明できないような不埒な行動は謹んで下さい」  
紫乃は熱があるというのに実に冷ややかな物腰だ。

「せっかく副会長も会計も置かないで、私ひとりの自由な生徒会だったのに。窮屈になったものね」

会長はそう言いながら紫乃の横を通り過ぎ弓奈に歩み寄る。

「だけど構わないわ。鈴原さんのお陰でこんなに可愛い会員が手に入っただもの」

会長が弓奈の手に触れようとした瞬間、紫乃が慌てて叫んだ。

「わ、私の弓奈さんに触らないで下さい！」

弓奈と小熊会長が「え？」と言って紫乃の方を振り向く。紫乃は小さく咳払いをしてそっぽを向いた。

「・・・なんでもありません。とにかく弓奈さんが嫌がることはしないで下さい」

「んもう。わかったわよ」

会長は笑って弓奈の側から離れると、窓際の椅子に腰掛けて書類の整理を始める。紫乃もパジャマ姿のままカーテンの結び紐を整えたり、ホワイトボードの日程を書き加えたりし始めた。当然のように生徒会の仕事を始める二人を前に、弓奈はまだ少し頭が混乱していた。

「ていうことはさ」

「ん？」

二人が弓奈を振り返る。

「これから私は生徒会のお手伝いをするのかな」

そう言った時である。弓奈は小熊会長と紫乃の向こう側の窓が桜色に輝いていることに気がついた。管理棟の裏側には桜の海が広がっていたのだ。

「んー、お手伝いというかあ、正式なメンバーで」

会長は自分の豊かなブロンドヘアをなでる。

「私と弓奈さんで副会長兼会計です。まあその・・・頑張りましようね」

紫乃は少し照れながらおでこの冷却シートを取ってそう言った。なんとなく弓奈は二人に見とれてしまった。

伝統ある名門校サンキस्त女学園の生徒会長で、美しいハーフの少女小熊アンナ。十七代目学園長 鈴原真理子の長女で、クールでカッコイイ少女鈴原紫乃。そして花畑農家を営む実家に育ち、あやとりと給食を得意とする少女倉木弓奈。学園自治のため三人手を取り合って生徒会を運営していく・・・

弓奈は少しのあいだ宙を仰いでいたが、やがて大きく息を吸ってこう言った。

「むりむりむりむりむり！」

## 10、休み時間

廊下の曲がり角に小熊会長を見た。

弓奈は身を隠すために理科室の扉に手をかけるが鍵がかかっていてびくともしない。隣りの理科準備室の扉も同じだ。5メートルほど戻れば別の教室があるが二年生の教室なのでそこに駆け込んだら非常に怪しまれる。目立たない事が学園生活のテーマである弓奈には不可能な行動だ。ならば窓はどうか。残念ながらここは5階なのでそのアクションにはパラシュートの類いが必要である。残された道は「物陰に隠れる」の一択なので弓奈は当たりを見回したが、そこには消火器が一本設置されているだけだ。この消火器の細い陰に身を隠すには未来のダイエツト技術が必要である。弓奈危うし。こんな時に紫乃がいれば・・・

「こんな時に紫乃ちゃんがいれば、っていう顔ね」

間に合わなかった。会長のささやきに弓奈の左耳はぞわぞわした。

「こ、こんにちは会長さん」

「こんにちは。お一人で二年生の教室の前を行ったり来たり。もしかして私に会いに来てくれたのかしら」

今日の小熊会長は巻き髪である。弓奈にはちょっとできない派手な外巻コロネだ。

「いえいえ。音楽室に忘れ物を取りに行くところですよ」

「あら。だったら私も一緒にしようかしら」

「どうしてですか!」

会長は弓奈の背後に回り、今度は弓奈の右耳に唇を寄せた。

「どーしても」

小熊会長は決して悪い先輩ではないのだがとにかくエツチな人なので弓奈は事ある毎にびくびくしななければならず、出来れば近づかずに暮らしていきたいと弓奈は思っている。だが「同じ生徒会のメ

ンバーが困っているんだから」とか「生徒会長としての務め」とか  
なんとか言って先輩は結局弓奈について来た。

「弓奈ちゃん。手繋ごうか」

先輩がまた訳のわからないことを抜かし始める。

「あの・・・小熊先輩。実は私悩みがありました」

「あらあ、お肌荒れちゃう」

「いやそうことではなくて、その・・・タッチとかハグとかキスと  
かは控えて頂けると嬉しいんですけど。えへ」

弓奈は頑張っすぎてこないスマイルを添えた。先日生徒会室で会  
長から首の辺りにキスを貰って以来それが度々夢に出て来て弓奈は  
うなされる。幼い頃は年上の女性からもっと過激なイタズラを受け  
ていたはずなのだが、あまりに久しぶりだったために彼女の心はグ  
ルグルとかき乱されたのだ。

「弓奈ちゃんは本当に綺麗」

会長は横から弓奈を壁に追い込んで弓奈の指をそつと触った。

「シルクみたいなお肌。すごい・・・すべすべ」

小熊会長が弓奈の話を全く聴いていないことがこれで証明された。

「ルノワールに弓奈ちゃんの絵を描いてもらいたかったわ」

「るのわーる、ですか」

力づくで抵抗して廊下を走って逃げようかなどと弓奈が考えてい  
ると、会長は弓奈の手を強引に引っ張って電気も点いていない家庭  
科室倉庫の扉を開いて中へ駆け込んだ。こういう時に限って扉に鍵  
が掛かっていないのである。

「先輩・・・私、怒りますよ!」

自分の血を吸いに来た蚊の頭をなでてやったことがあるような心  
優しい弓奈が先輩に対し怒れる訳がない。聡い小熊会長は弓奈のそ  
ういった性格に気づき始めたのかも知れない。

「ここなら誰も来ないわ」

カーテンの閉じている家庭科室倉庫内は薄暗い。先輩は背後から  
弓奈を抱きしめ、弓奈の耳の辺りに頬擦りをした。会長のほっぺは

柔らかかった。

「シャンプーに使ってるの？」

「・・・ウェリントンシャンプー。ピーチの香り」

唐突な質問に素直に答えてしまう弓奈。先輩は弓奈のお腹を指でコチョコチョコしながら弓奈の温かい首元に鼻先をつけた。

「いい匂い。弓奈ちゃん・・・すごくいい匂いよ」

小熊会長はどんなときも水色のお目々で上品に頬笑んでいるので、どこまでが冗談でどこまでが本気なのかサッパリ分からない。

「先輩・・・やめて下さい」

頼りになる紫乃は今頃教室で弓奈の帰りを待っているに違いない。弓奈は自力でこの状況を打開する策を練ろうとするが、会長の柔らかい体が密着してきたことに動揺してしまっただけではない。

「弓奈ちゃん・・・」

会長はそう言うときゆうつと腕に力をいれて彼女の体を強く抱きしめる。そして弓奈の首筋にパクつと食い付こうと口を近づけた。

「やめてくださいーい！」

「ちょっとうるさいんですけど」

弓奈が叫んだ瞬間、家庭科準備室の扉が開いた。扉を開けた生徒の姿は逆光になっているために顔までは把握できないが、紫乃でないことは確かだ。

「・・・こんなところでなにしてんですか。なんかすごく怪しいんですけど」

彼女はぶっきらぼうな物言いで弓奈たちに尋ねる。会長は「んもぅ」と言っただけで弓奈を解放した。会長には扉に鍵をかける習慣がないらしい。

「楽しかったわ弓奈ちゃん。また今度ね」

何が楽しかったのか弓奈には理解できなかったが、会長はそう挨拶をしてまぶしい廊下へ消えていった。弓奈もブレザーやリボンを整えてから扉へ向かった。

「えーと、助けてくれてありがとうございます」

弓奈は扉を開けてくれた少女にお礼を言った。

「あなたたちこんなところで何してたの？ 今の生徒会長じゃ・・・」  
少女は弓奈の顔を見たときとたんしゃべらなくなった。目を合わせた瞬間に相手が絶句するケースは弓奈にとってよくあることなのだが、少女の表情には何やらどす黒い悲しみがにじみ出ている。

「・・・どうしたんですか」

少女は弓奈と同じくらいの身長でストレートパーマをあてた綺麗な黒髪をしていて、リボンは緩みまくり、開いた口からはワイルドな犬歯が覗いている。

「・・・ばか」

「え」

少女は廊下を走り出した。

「ばかあああ！」

この時の弓奈には彼女が何にショックを受けてそう叫んだのかわからなかった。そしてまさかこの後彼女と長い長い付き合いになっていこうとは夢にも思っていない。

とにかく面倒は全て片付いたので弓奈はほっと一息つき、紫乃の待つ教室に戻ることにした。

「紫乃ちゃんただいまあ」

「お、遅いです弓奈さん。心配・・・じゃなくて待ちくたびれていました」

「いやあ、ごめんね。いろいろあってさ」

「それで、音楽のテキストはありましたか」



## 11、くじ引き

来週は横浜へ遠足に行くらしい。

生徒たちにとってその行き先など些細なことである。どこへ行くこととやることは大して変わらない。バスに乗って歴史的価値のある名所をいくつか巡り、ご飯を食べ、再び周辺を観光しバスに乗って学園へ帰る。言ってしまうばただそれだけのことなのだ。

重要なはその班分けである。

「・・・では、くじ引きでいいですね」

「はい」

紫乃はクラス委員になっていた。紫乃は学園長の娘であるばかりでなく、朝一番に教室へ来て掃除をしているくらいの優等生なので名実ともにクラス委員に適任ということで先日ホームルームで就任が決定したのだ。

「・・・それじゃあ窓側の列の人からくじを引きに来てください」

緊張した面持ちで紙袋の中に手を突っ込みくじを引いていく生徒たち。多数決でくじ引きに決まってしまったが、班分けは好きな人と組めるほうが良かったと紫乃は思った。好きな人・・・つまり弓奈と同じ班になることが紫乃の望みである。だが弓奈と同じ班になりたいのは他の生徒も同じなので、公平で誰にもチャンスがあり抜け駆けと責められることもなくくじ引きが支持されたという訳である。

「クラス委員の仕事、板に付いて来たね」

くじを引きに来た弓奈がウインクしながら小声でささやいた。紫乃が弓奈に恋心を抱いていることを弓奈は全く気づいていない。

「・・・いいから早くくじを引いて席に戻って下さい。後ろの人がつかえます」

そしてそれは気づかれてはならないことなのだ。

「私、紫乃ちゃんと一緒の班になりたいなあ」

弓奈は恥ずかしそうに笑いながらいつもの上目遣いで紫乃にそう言って席へ帰っていった。私もそう思っています・・・きつとあなた以上に・・・紫乃は弓奈の背中を見つめながら心の中でそう呟いた。

さて、くじにはAとFのアルファベットが記されており、同じアルファベットを引いた者同士で班が形成される。紫乃は紙袋に残った最後の一枚を引いたわけだが、そこにはFと書かれてあった。

「D班の人ー！」

「Aの人はどこでしょうか」

「E班E班E班E班！」

紫乃は遠くからじつと弓奈の表情を見つめていたが、彼女はどの班の呼びかけにも応じず席から動かない。

「それじゃ・・・Fの人」

紫乃はわざと弓奈とは違う方を向いてからそう呼びかけた。

「はい！ 私Fです！」

冷めた合理主義者である紫乃は神様の存在を信じてはいない。だがこの瞬間ばかりは見えない操り糸の存在を信じ、それに心から感謝した。返事をして立ち上がったのは紛れもなく弓奈だったのだ。弓奈はポニーテールをご機嫌な調子で揺らしながら甘美な香りを運んで紫乃の元へやってきた。他の班の生徒たちはがっくりとうなだれている。

「やった！ 紫乃ちゃんと一緒だ」

「ま、またあなたですか。迷子にはならないで下さいね」

「はい！」

ふと見れば弓奈の桃色の頬の向こう側にもう一人少女が立っている。班のメンバーは二人だけでないことを紫乃はすっかり忘れていたのだ。AとE班は4人班だがFだけは3人班なので、もう一人のメンバーが例えば小熊会長のような好色家だったら弓奈の護衛が非常に面倒だと紫乃は思った。その少女はおずおずと紫乃たちに歩み

寄る。

「私・・・倉木さんたちと一緒に班なんですか」

鈴原さんたちと言わない時点で既に少女が弓奈を意識していることがわかる。だが紫乃にはこの少女がそれほど積極的な子には見えなかった。うつむき加減に自分の指をいじり、可愛い目元も前髪の方こうに隠してしまっている。

「私のこと知ってるんだ。改めまして倉木弓奈です。よろしくね」

「あっ・・・よろしく」

「あなたのお名前教えてくれる？」

二人ともその少女の名前を知らないので弓奈はそう質問したのだが、彼女に名前を訊かれた瞬間少女は少しだけがっかりしたような、それでいて何かが吹っ切れたような複雑な表情を見せた。

「松尾めぐみです。よろしく」

「よろしくね。めぐみちゃん」

弓奈は紫乃以外の女子生徒に自ら接近したりはなるべくしないようにしているのだが、それでも新しい友達の前感に無邪気に歓喜した。紫乃もめぐみという少女が今すぐに自分と弓奈の關係に害を及ぼすとも思えず、少し安心してメンバー表に名前を書いた。残り時間は班ごとに市内の観光案内図を囲んで話し合いをする時間だ。

「F班は他の班の見本となるような意識の高い集団を目指します」

弓奈のアツい支持により紫乃が班長となった。

「自由行動は中華街めぐりたいです！」

弓奈は野菜がたっぷり入った緑色の中華まんが食べたい。

「それじゃあお昼は中華にしましょう。自由行動は210分もありますので他に行きたい場所が言ってください」

なんとなく紫乃と弓奈の視線がめぐみに集まる。彼女が先ほどから黙ったままだからだ。めぐみは二人の様子に気がついて少し慌てて口を開いた。

「あっ・・・自由行動ですか。そう・・・ですね」

めぐみは弓奈の目をちらっと見てから小さい声で続けた。

「海が・・・見たい」

めぐみのこの提案に弓奈が目を輝かせた。

「いいねえ海！ ちょっと遠いけど中華のお店でお持ち帰りして、海見ながら食べようよ」

横浜湾に自然の美による癒しを求めることは些かなセンスな気もしたが、弓奈の嬉しそうな顔を見た紫乃は予定表に「海」とでかでか書き込んだ。

めぐみは窓の方を向いた。教室の窓のパノラマには散り終えた桜の枝々が切り取られていて、不意によぎったウグイスの姿が春の空へにじんで消えていくのが見えた。

## 12、シークレット・ガーデン

窓際へウグイスがやって来た。

なかなか発車しない電車の窓に興味を持って飛んで来たに違いない。めぐみは読みかけていた本に押し花のしおりを挟んで閉じるとウグイスの艶やかな羽に指を伸ばした。ウグイスはしばらくめぐみの指先を優しくつついて戯れていたが、車掌のホイッスルを聴くと電車が動き出すより先に窓際を飛び立ち、再び春の空へ帰っていった。

めぐみは今年で二十歳になるのでこうして故郷へ帰って来たのはおよそ13年ぶりとなる。なにしろ7才の誕生日を前に引越してから一度も訪れていなかったため、車窓から見える景色には懐かしさよりも新鮮味のほうが強かった。だがこの町には大切な思い出がある。幼い頃のあの人との思い出が。めぐみはチケットに印字された故郷の名前を見つめながら、あの人との思い出を追い始めた。

めぐみが15才の時、あれは高校一年の遠足。サンキスト女学園で奇跡的に再会し、同じクラスになったあの人はめぐみのことを覚えていなかった。

「めぐみちゃんも食べる？」

弓奈が天使のような笑顔でめぐみに緑色の中華まんをちぎって差し出した。

「あ……ありがとう」

「ぼーっと波を数えていたためぐみは弓奈の声に振り返った。班長である紫乃の作戦通り、海浜公園の最も東側の防波堤付近にはサンキストの生徒は誰もおらず、ベンチの据えられた木製のテラスはF班の三人の貸し切り状態だった。

「肉まんはすっかり冷めてしまいました。ここまで来た甲斐はありませんでしたね」

紫乃が二人の間に腰掛ける。彼女のいう通り三人の眼前に広がる海原の輝きの美しさといったら心を奪われるほどだ。ここへわざわざ足を運ばなければこの光景をF班で独り占めすることは出来なかつただろう。

「あ」

弓奈が何かに気がついたらしい。弓奈の声は鈴の音のように澄んでいるので波音の間にも二人の耳によく届く。

「どうしたんですか弓奈さん」

「紫乃ちゃん大変だよ。私たち飲み物持ってないじゃん」

華やかな中華街の雰囲気は浮かれていた一行はどこかでお茶を調達してくるのをすっかり忘れていたのだ。弓奈の前では硬派でいた紫乃は、ここで慌てては名が廃ると思い努めて冷静に答える。

「も、もちろん分かっていました。飲み物は重いのであるべく海に近いところで買おうと思っていたのです。船着き場の手前にあった自販機で買ってきます」

「じゃあ私たちも」

一緒に立ち上がるうとする二人を紫乃は小さな手のひらで制した。ここで三人そろって船着き場まで戻っているのは、班長である自分の計画に不具合があったことが二人に気づかれてしまうと思ったのだ。「いえ、私だけで充分です。お二人はこの場所を確保しておいて下さい。すべて予定通りなんです。お茶でいいですよ。お茶。そう、中華にはお茶です。お茶」

財布を握った紫乃はそう呟きながら自販機を目指して赤いレンガの道をパタパタと駆けていった。

潮風が弓奈とめぐみの間を穏やかに過ぎて行く。弓奈は中途半端に開いてしまった二人の距離を埋めるためにめぐみの方に一歩ずつ座った。

「めぐみちゃんは海が好きなんだね」

めぐみは「え」と言って顔を上げた。

「いやあ、先週の話し合いのとき海に行きたいって言ったのもめぐみちゃんだったし」

めぐみは少し頬を赤らめてから海を見つめた。彼女の視線を追って弓奈も遠い水平線を眺める。

「昔、私の大好きな人が言ってたんです。海はカツコイって」

「わお、そうなんだ。確かに海ってカツコイ。私もそう思う」

ずっと内陸で育った弓奈は幼い頃から海に憧れてたので、海はカツコイなどという一見つかみ所のない意見にも素直に同意できる。そんな弓奈の言葉を聴いてめぐみはクスッと笑った。そしてその深く優しい瞳を波間に向けたまま、弓奈の知らない「誰か」の思い出を語り始めた。

「小学校に入る前の話なんですけど、私少し変わった遊びをして「変わった遊び」

「自分だけの秘密の場所を探して、そこに自分の宝物を集めるの。宝物っていつでも自分の好きなビー玉とか小さなガーデンオーナメントとか、そういうやつなんですけどね」

めぐみの声は弓奈の耳にとても温かく響いた。

「それでいつだったか私、テニスボールがすごく欲しい時期があった、近所の公園のフェンスから隣接する高校のテニスコートをしゅと眺めてたんです」

「なんだか可愛い」

その時のめぐみの姿を想像して弓奈はクスクス笑った。

「そこへあの人 came たんです。遊ぼって言って」

「その時に初めて会ったの？」

「うん。というか、幼稚園は同じだったはずなんだけど一度も話し

たことなかったの。でもあの人は・・・暗くて変わり者だった私に面白い話をたくさんしてくれた。私の知らないことをいっぱい教えてくれたの」

めぐみの声がかすむ。

「嬉しかったの・・・すごく嬉しかったの。自分の居場所がなかった私に、やっと・・・心の拠り所ができたの。私を認めてくれた・・・初めての人の」

めぐみの頬に涙が一筋伝うのを見て弓奈はどうしていいかわからなかったが、とりあえずもう一歩めぐみに寄って彼女の頭をなでてやった。

「小学校が違つたし、7歳になるとき私が引越しちゃったからすぐに会えなくなっちゃったんだけど、最後に私・・・あの人を私の秘密の場所に呼んだの。教会の敷地に背が低い木が集まってできた葉っぱのトンネルがあつて、その一番奥が私の秘密の場所だったの。今はなくなっちゃったらしいんだけどね。そこはあの頃の私が入っただけでいっぱいになるような狭い場所だったけどあの人はすごく喜んでくれた。私・・・あの人になにかお礼がしたかったから宝物をなにかあげようと思っただけど・・・」

弓奈はめぐみにそつとハンカチを差し出した。

「あ・・・あの人は私の持つてるとんな宝物よりも、そこに咲いてる花に夢中だったの。ブドウみたいなの、他の木に寄り添って伸びて行く植物で、薄紅色の大きな花で・・・」

花屋で育つた弓奈の脳裏にはその花の姿がありありと浮かんだ。きつとクレマチスの花に違いないと弓奈は思った。いつからかは分からないが弓奈の大好きな花である。

「難しいことは当時分からなかったけど、苗みたいな感じでひとつその花をあげたの・・・あの人は天使みたいに笑つてた。自分も私の大切な秘密の場所にこの花咲かせるんだーって言って」

「・・・素敵な子だね」

「うん。・・・きつとすぐ枯れちゃったと思うんだけど、それでも



あの人が私の秘密の場所の一部を、あの人の家の裏庭とかに植えてくれたりしたのかなと思うと・・・今でも涙が出るくらい嬉しいの」  
めぐみの涙が海と同じ色できらめいた。

「あの人は・・・今も昔も私にとっては高嶺の花だから・・・片思いだけど、あの人はずっと、ずっとずっとずーっと・・・私の心の居場所なの。大切な人なの・・・」

不意に二人は背後に靴音を聴いて振り返る。

「ふえええん！」

しばらくベンチの陰からめぐみの話を聴いていたのだろう。そこに立っていたのはお茶を三本持ったまま涙で顔をひどい有様にした紫乃だった。

これがめぐみと弓奈の最後の思い出となった。なぜならめぐみは高校一年の夏前に両親の転勤が理由でサンキスト女学園から転校してしまったからである。どうせ寮暮らしなのだから私は行かないとめぐみは最後まで抵抗したが、あまりに距離があることを理由に結局学校から連れ戻されてしまったのだ。

駅前広場の様子はすっかり変わってしまった。唯一覚えていた八百屋もすっかり改装してしまって当時の面影はない。幼少時代を過ごした町とはこんなものなのかも知れない。めぐみは特に行く当てもなく坂道を登った。

遠足の日、めぐみはついつい本人の前で色々なことを話してしまったが、結局弓奈はそれが自分の話だとは最後まで気づかなかつたらしい。しかしそれで良かったとめぐみは思った。弓奈のことを想っている人はたくさんいて、それに弓奈が戸惑っていることはめぐ

みも知っていたのだ。そこで重要なのは、弓奈が誰を想うのかということである。確かに幼い頃の弓奈はめぐみにとても優しくしてくれたが、それもひと時のお遊びだったに違いない。めぐみにとって弓奈は何ものにも代え難い宝物だが、弓奈にとってめぐみは大切なものなんかではなかったのだ。

そんなことを考えながらめぐみは小さな高校の前へやってきた。サンキスト女学園のような特徴的な外観を持つ学校のほうが珍しく世の高校の校舎などどれも似たようなもので、こうして通ってもない故郷の学校を見てもそれほど懐かしいとは思えない。だが昔テニスボール欲しさに眺めていた例のテニスコートを少し見てみたい気になり、めぐみはその学校の塀をゆっくりと伝っていった。

公園も残っていた。思い出の中のものより遥かに小さく、びっくりするほど寂れていた。しかしこれでもめぐみにとって忘れられない大切な場所だ。なぜならここはめぐみと弓奈が初めてしゃべった場所、言わば二人の思い出の始まりの場所なのだから。あの学校のテニスコート眺めるために、小さな滑り台の奥の、古びたブランコの裏にあるあのフェンスにしがみついて……

「え」

めぐみは足を止めた。

「……嘘」

錆び付いたフェンスに咲く一面の薄紅色の花。

もうテニスコートが見えぬほどに咲きこぼれたその花は、かつてめぐみの秘密の場所に咲いていたものと同じクレマチスの花だった。14年ものあいだ人知れず毎年咲き続けたその花たちが、弓奈の大切な場所をめぐみに教えてくれているのだ。

めぐみは涙にかすんでいく視界の中で、遠い日のあの人の笑顔を思い出していた。

### 13、お茶

キャンバスを走る鉛筆の音。

小熊会長の隠れた趣味、それはデッサンである。今日は鉛筆と木炭で生徒会室のテーブルに置かれたティーカップを描いていた。今は一つしか置かれていないが、すぐに三つになるのでキャンバスのカップの両側にはスペースを取っている。

「失礼します」

二つ目のカップの主が部屋に入ってきた。

「こんにちは弓奈ちゃん。遠足は楽しかったかしら」

「はい！ それはもう」

会長から狙われ、時折イタズラ未遂をされているというのに弓奈のこの無邪気な笑顔。弓奈は稀に見る素直な少女である。

「私も去年の遠足は面白かったわ。行き帰りのバスとかも」

会長は席を立ってお茶を用意する。お茶にはこだわりがあるのでいつも先輩自ら淹れているのだ。

「んー行きのバスはみんな盛り上がりすぎてたんですけど、帰りは紫乃ちゃんがずつと泣いてたんですよ。切ないですねえ、切ないですねって言って」

「失礼します。弓奈さん会長に余計なお話はしないで下さい」

「は、はい！」

三つ目のカップがやって来た。どうやら紫乃は遠足で何やら恥ずかしいところを弓奈に見られてしまったらしい。

「金髪会長、私たちからお土産です」

「まあ嬉しい」

「後輩の優れたセンスに目を丸くすることも生徒会長としての務めですよ」

紫乃はいつだって冷静だ。さすが学長の娘だけあると会長はいつ

も感心しているのだが、弓奈のことになるとなぜか必死になるので謎の多い少女でもある。会長が弓奈にイタズラをしたくなつた時は彼女のボディガード役である紫乃のいないタイミングを見計らわなければならず、最近はそのような機会は皆無である。これは由々しき事態だ。

「さて、どんなお土産かしら」

やたら軽い割にバスケットボールほどもある大きな包みを丁寧に開くと、中からは浅い海底にいるウミウシのような奇怪な形相をしたピンク色のぬいぐるみがでてきた。

「開国ミュージアムで買って来た『珍獣クロフネ』桃色バージョンです！」

弓奈のまぶしいほどの笑顔が紅茶の湯気の間で輝いている。

「なにこれ、変なの」とは口が裂けても言えない。

「あ……ありがとう弓奈ちゃん。大事にするわ」

横で紫乃がニヤッと笑つたのが見えた。

「今日集まってもらつたのは他でもないわ」

会長はブレザーを脱いで椅子の背もたれに引っ掛けるとホワイトボードに向かつて大きな字を書いた。

「体育祭に出るわよ！」

弓奈と紫乃は顔を見合わせた。

「……会長。それ普通のことですけど」

「ちがうの。生徒会として種目に出場するのよ。このリレーで」

小熊会長が手元のプリントで指差したのは体育祭のプログラムの最後から二番目というなかなか盛り上がる配置をされた『クラブ対抗リレー』だった。このリレーはクラブ対抗と銘打たれているが、やる気さえあればクラブ・同好会以外の非公式団体が参加することができる。体育祭運営に支障さえ来さなければ、生徒会というチームで参加できないことはない。

「会長はどうしてリレーがしたいんですか」

弓奈は運動は比較的得意なのだがとにかく目立ちたくないの  
でリレーには出たくない。

「生徒会の宣伝よ。ほら、秋の選挙にはたくさん立候補が出るよ  
うだね」

紫乃たちがやってくるまで生徒会を一人で好き勝手やっていた会  
長の台詞とは思えない。ちなみに小熊会長はまだ二年生なのでもう  
一期務めることも可能なはずなのだが前例がないのでなんとも言え  
ない。

「だから弓奈ちゃん。生徒会のために、一緒にがんばりましょうね」  
会長は弓奈の肩に手を置いて必要以上に顔を近づけて言った。ど  
うやら会長は単に弓奈と一緒にの種目に出たいだけらしい。その様子  
を紫乃は不機嫌そうに見つめる。

「小熊会長。生徒会の宣伝は大いに結構ですが、どうやって3人で  
リレーをするんですか。対抗リレーは5人でエントリーするって書  
いてありますよ」

「それなら大丈夫。半周する人が4人、アンカーは一周っていうの  
が基本だから3人が一周ずつ走れば計算が合うのよ。こっちに不利  
な条件なら体育祭の実行委員も許可してくれるはずだわ」

会長は本気らしい。会長は弓奈の手を握って訴える。

「ね、お願い。一緒に走ってくれませんか。一周が嫌なら半周でいいか  
ら。その分私が余分に走るわ。弓奈ちゃんからバトンを受け取りた  
いのよ」

そこまで言われれば弓奈も断りづらい。

「紫乃ちゃんは、どう?」

「え」

紫乃は想像した。体操服姿の弓奈が少し頬を染めて紫乃に手を差  
し伸べ「紫乃ちゃん! もう少しだよ! がんばって!」と言う。

紫乃が最後の力を振り絞りバトンを差し出すとそれが彼女の白い手  
の平に吸い付くように収まる。バトンを通じてお互いの心を通い合

わせる瞬間である。弓奈の星空のような瞳はぎりぎりまで紫乃の目を見つめ続け、最後に紫乃のハートを射抜く流れ星のようなウィンクを残し颯爽とトラックを駆けていくのだった。

「・・・わるくないですね」

「紫乃ちゃんどうしてほっぺ赤いの？」

会長は二人の様子を見ながらご機嫌な様子で『珍獣クロフネ』を抱きしめた。

「それじゃあ決まりね。今年の体育祭は楽しみだわ」

弓奈をめぐって小熊会長とソフトな戦争状態にある紫乃が今日は珍しく会長の意見に同意した。利害関係の一致というのは恐ろしいものである。

テーブルの真ん中では三つ並んだティーカップが温かな湯気をたてて寄り添い合っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7545w/>

---

おんなのこ×おんなのこ

2011年11月28日02時46分発行